

教師一人一人がエージェンシーを発揮しやすい

授業改善につながる研修の提案

— 「美術のおしゃべり」による雑談型の研修の試み —

長期研修員 南雲 優人

《研究の概要》

本研究は、美術科の学習指導を行う教師が、日々の授業改善を進めていけるようにするためのものである。

教師には、新たな知識や視点を学び続けていくことが求められている。しかし、教師は日々多忙である。また、美術教師は学校に一人しかいないことが多いため、授業改善について気軽に相談することが難しく、一人で授業改善を進めていくことに難しさがある。一方で、研修の方法は多様化しており、ICTを活用することによって、他の学校の教師とも気軽につながりをもてるようになっている。

これらのことから本研究では、おしゃべりの特徴を取り入れた雑談型の研修が、教師一人一人の授業改善につながっていくことの有効性について検証した。

キーワード 【美術教育 教職員研修 授業改善 エージェンシー】

群馬県総合教育センター

分類記号：G05-06 令和5年度 282集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Zoom及びZoomロゴは、Zoom Video Communications, Inc.の商標または登録商標です。

LINEはLINEヤフー株式会社の商標または登録商標です。

Google、Googleドキュメント、Googleスプレッドシート、Google Forms、Google Jamboard、Google Workspace

Googleサイト、Googleマップ、Googleスライド、Chromebookは、Google LLCの商標又は登録商標です。

なお、本文中にはTMマーク、®マークは明記していません。

I 主題設定の理由

令和4年12月に出された中央教育審議会¹⁾の答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」の中で、「高度な専門職である教師は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努める義務を負っており、学び続ける存在であることが社会からも期待されている」と述べられており、今日における教師が日々学び続けることの重要性について言及している。また、教師の学び方についても同答申の中で、教師の個別最適な学びと往還した協働的な学びや、「知識伝達型」の学習コンテンツに留まらない「現場の経験」を重視したスタイルの学びなどについて言及しており、これまで以上に教師の主体的な学びの姿が求められていることが分かる。OECDのラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030においてエージェンシーが中核的概念として用いられており、教師もエージェンシーを発揮して主体的に学ぶことが重要であると言える。教師の学びの場としては、校内や市町村、県などが主催する様々な研修の機会がある。研修の機会はとても重要であるが、教師の仕事は日々多忙であり、研修もまた多忙な業務の一つと感じ、負担感をもっている教師は少なくない。

置籍校、また市内の美術教師にアンケートを行ったところ、「学習指導を行う上で、困っていることや不安なことがありますか」という質問に対して、「たくさんある」と回答した教師は28.6%、「少しある」と回答した教師は57.1%であり、およそ86%の教師が日々の学習指導に関して何らかの困り感や不安を抱えていることが分かった。しかし、美術教師は各中学校に一人ずつ配属されることが多く、小規模校の多い地域では、正規の美術教師がいない学校もたくさんある。文部科学省の実施する「令和3年度教員免許状授与件数等調査結果」の中学校、教科別の普通免許状の授与件数を見ると、「美術」の授与件数は「保健」「技術」「家庭」に次いで低く、美術科の免許をもつ教師が少ないことが分かる。

これらのことから、美術教師は学習指導について困り感が生じた場合に、身近で教科専門性の高い話ができずに、自ら調べることが主な解決方法となっている。しかし、指導する教師の環境や生徒の実態が異なるために、ここで得られる知識や視点が、どの授業でも必ず効果的なものになるわけではなく、このような状況では、授業改善を進めていくことが難しい。

市内の美術教師に行ったアンケートの「困り感や不安を解消するために、どのようなことが必要だと考えますか」という質問については、「気軽に質問や相談ができる仲間や場の設定」「他の教師の授業を見たり、実践を知ったりするための機会」という二つの回答が最も多く、次いで「研修の機会を増やすこと」という回答が多かった。この結果から、多くの美術教師が他校の美術教師とつながれる場や、学習指導について学びが得られる研修の場を望んでいることが分かった。日々の学習指導に関する困り感を、必要に応じて気軽に相談し、解決できることが理想であると考え。気軽に相談でき、学習指導に関する自分の考えを自由に話しながら、困り感を解決していくためにも、雑談のような雰囲気の中で、自由に話せることが必要ではないかと考えた。

研修の方法についても、ここ数年で多様化している。対面、集合型で行われるもの以外に、オンラインで行われる同時双方向型やオンデマンド型などの方法も一般的になり、場所を選ばずに参加できる研修も増えた。本研究においても、ICTを活用してオンラインで研修の場を設定することによって、場所の制限を受けることなく、負担感が少なく、教師同士のつながりがもてるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究では、美術教師が、「美術のおしゃべり」というおしゃべりの特徴を取り入れた雑談型の研修の中で、授業改善に向けた創造的なやり取りを行っていくことによって、新しい知識や視点の授業への生かし方についての考えが深められ、それぞれの教師が授業改善を進めていけると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

美術教師が、おしゃべりの特徴を取り入れた雑談型の研修である「美術のおしゃべり」を行うことに

よって、新たな知識や視点の授業への生かし方についての考えを深めることができ、それぞれの授業改善につながっていくことの有効性について明らかにする。

Ⅲ 研究の仮説

教師のエージェンシーを発揮し、ICTの活用によって負担感が少なく続けられる、雑談型の研修「美術のおしゃべり」を行うことで、新たな知識や視点の授業への生かし方についての考えが深められ、それぞれの教師の授業改善につながっていくであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 言葉の定義

① 「美術のおしゃべり」とは

本研究では、美術教師同士が行う、教師のエージェンシーを発揮しやすい、おしゃべりの特徴を生かした雑談型の研修を「美術のおしゃべり」とする。「美術のおしゃべり」は、直接会っておしゃべりをするだけでなく、Zoomなどを使ったビデオ会議や、LINEのようなチャット機能を活用した文字や画像によるやり取りを通して、問題解決に向けた創造的なやり取りを行っていく。ICTを用いることで、簡単で、気軽に、負担感が少なく続けることができ、継続した取組が行われることが望ましい。

② 「雑談型の研修」とは

問題解決に向けた創造的なやり取りを行っていく際に、効率よく端的に行うやり取りとは異なり、問題に対して自由で気軽に話せる雰囲気の中で、様々な視点から出される意見を基にして、よりよい意見を練り上げていくやり取りを、本研究では「雑談型の研修」と捉えた。

③ 「教師のエージェンシーを発揮する姿」とは

問題を自分事として捉えられると、自ら授業改善しようとする意志が高まる。そして、授業への生かし方についての考えが深まると、実際に授業改善を行うことができる。このように授業改善に向かう姿を「教師のエージェンシーを発揮する姿」と捉えた。

(2) 授業改善の実現に向けて

新たな知識や視点は、指導書や書籍、インターネットで調べたり、研修等で得たりすることができる。しかし、授業への生かし方については、指導する教師の環境や生徒の実態が異なるために授業者が自分で考える必要がある。授業への生かし方について考えを深めることが授業改善の実現に向けて必要である。

(3) 創造的なやり取りについて

複数の教師が主体的・対話的にやり取りを行い、よりよい考えを練り上げていくことを創造的なやり取りと捉える。また、創造的なやり取りを行うためには、それぞれの教師の内発的動機付けを促し、教師のエージェンシーを発揮する必要があると考える。

教師がエージェンシーを発揮しやすい条件についてEdward L. DeciとRichard M. Ryanの「自己決定論」という先行研究を参考にした。

(4) 自己決定論について

自己決定論とは、「関係性」「自律性」「有能感」の三つの欲求が満たされていくと、内発的動機付けを促すというものである。本研究では、この三つの欲求を「仲間とのよい関係性」「やることを自分で決められる」「能力の向上を自覚する」と言い換え、この三つの欲求が満たされていくと、授業改善に向けて行動しようとする意志が高まり、教師のエージェンシーの発揮につながると捉え直した。

(5) ICT活用の効果について

簡単で、気軽に、負担感が少なく続けることができるためのICT活用の効果について、本研究では次の点が挙げられる。まず、遠隔地をつなぎ同時双方向型のやり取りが可能になるという効

果である。ビデオ会議によって研修を行うことで、場所に制限されることなく互いの顔を見ながら複数の教師でのやり取りが可能になる。次に、必要に応じて必要な分だけ研修が行えるという効果である。教師からのニーズによって、チャットのやり取りで解決する問題や、ビデオ会議で話し合う必要のある問題など様々である。ビデオ会議の時間も、少しのやり取りで解決できる問題から、じっくり話したい問題と様々である。このように、問題に応じておしゃべりの方法や時間を気軽に選んで実施できる。

(6) 手立ての説明

① 「美術のおしゃべり」の始め方

本取組は沼田市内の美術教師を対象に行った。任意の取組のため、年度当初に趣旨を説明して参加を呼びかけ、その後必要に応じて随時参加できるようにした。また、ICTを用いて「美術のおしゃべり」を進めていけるように、チャットやビデオ会議ができる環境整備を行った。

② 「美術のおしゃべり」の要素

「美術のおしゃべり」が成立するための要素の一つ目は、話される話題が、美術の授業改善についての内容だという点である。二つ目は、雑談型の研修のために、そこに参加する教師が、自由に話したり、質問したりすることができる雰囲気を全員で意識していく必要があるという点である。三つ目は、おしゃべりの目的が、知識や方法をただ伝え合うだけでなく、授業の中への生かし方について言及していくという点である。この要素を参加者が理解した上で、おしゃべりを進めていくことが望ましい。

③ 「美術のおしゃべり」の参加者

「美術のおしゃべり」では、経験の少ない教師が、ベテランの教師に頼って、困り感を解決していくのではない。様々な立場の美術教師が、問題に関する自分なりの意見を言い合い、協働的によりよい考えを練り上げて、自分なりの答えを見いだしていくことを目的としている。そのために様々な年齢、経験年数を有する教師が参加していることが望ましい。

④ 「美術のおしゃべり」の設定

本研究では「美術のおしゃべり」が意図的な研修の場になるように、教師の困り感を解決するのに必要な回数や時間だけ設定する。ICTを活用し問題を解決していくために、参加者の負担感が最も少ない方法を選ぶことで繰り返し行っていくようにする（図1）。

⑤ 「美術のおしゃべり」の分析

「美術のおしゃべり」が進められていく過程を「仲間とのよい関係性」「やることを自分で決められる」「能力の向上を自覚する」の三つの欲求で分析をした（図2）。まず、負担感の少ない方法をそのときの状況に応じて選択することができる。スピード感をもってチャットで行ったり、じっくり話すためにビデオ会議や対面で行ったりとそのときに最もよいと思う方法を選ぶことができる。そして雑談型の研修のため、気軽に共感的な雰囲気生まれる。そこから教師の日々の実践やニーズを基にして「美術のおしゃべり」が始まる。この部分は「美術のおしゃべり」の特徴とも言える。また、実践やニーズが基になっていることから、様々な視点からの意見が出されることが期待される。これにより、課題が徐々に整理されていく。課題が明確になると、それぞれの教師から、これまでの実践や経験を基にした様々な改善案が出されていく。困り感を相談した教師はそれらの中

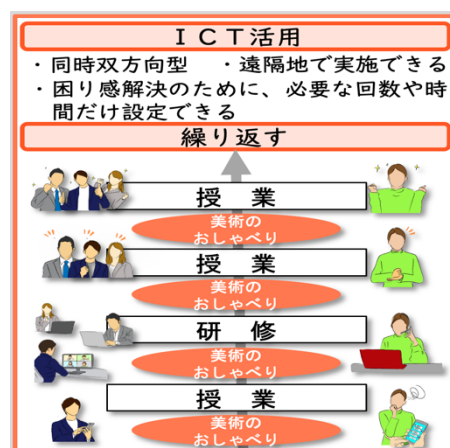


図1 「美術のおしゃべり」の設定

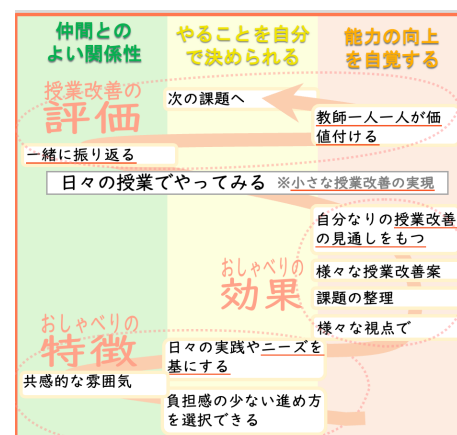
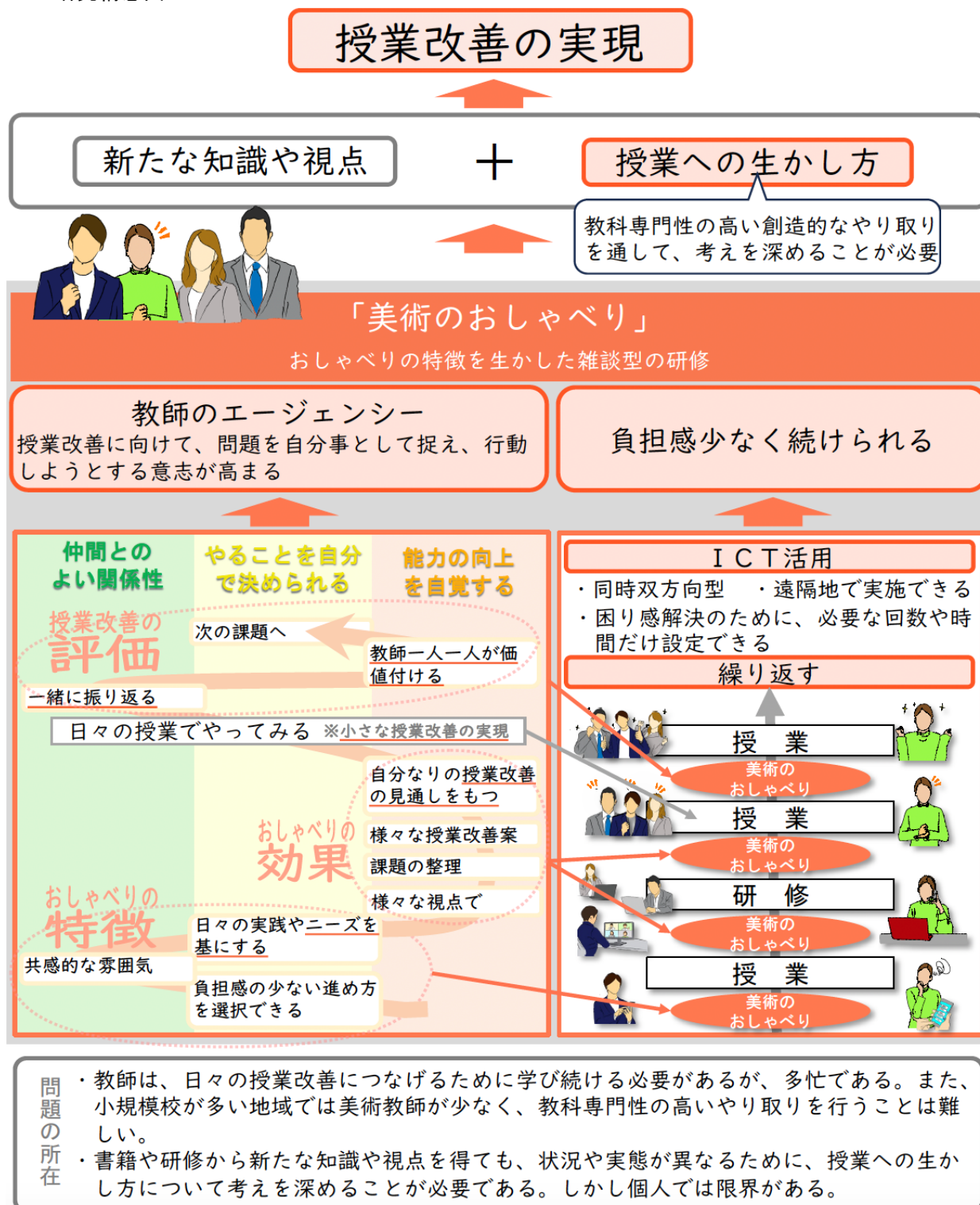


図2 「美術のおしゃべり」の分析

から自分なりの授業改善の見通しをもつことができる。この部分は「美術のおしゃべり」の効果である。その後、実際に日々の授業の中でやってみることで、授業改善が実現する。相談した教師以外の教師も、その問題への関心が高くなることで、問題を自分事として捉えられる。そして、授業への生かし方について考えることで、自分の授業改善が進んでいく。実際に授業に取り入れた様子や気付いたことなどの成果をその後の「美術のおしゃべり」の中で振り返ることで、教師一人一人が成果を価値付けて、次の授業改善の課題へ向かうことができる。この部分が授業改善の評価である。「美術のおしゃべり」ではこのように、三つの欲求を関連させながら満たしていくことで、授業改善への意志を高めていくことができる。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 実践の概要

提案・調査・実践	時期	方法
1 計画立案 アンケート	年度始め～	オンラインでの教師同士のつながりの整備 市内の美術教師を対象に実施
2 実践① 美術のおしゃべり	6月～7月	市内の美術教師を対象に実施
3 実践② 実技研修	8月	図工・美術主任を対象に長期研修員が実施
4 実践③ 美術のおしゃべり	9月～10月	市内の美術教師を対象に実施
5 実践④ 美術のおしゃべり	9月～10月	市内の美術教師を対象に実施
6 振り返り アンケート調査による検証	～年度末	研修システムについての評価・改善 市内の美術教師を対象に実施

2 検証計画

検証の観点	検証の方法
教師の日々の実践やニーズを基に、ICTを活用した、負担感が少ない方法で「美術のおしゃべり」を行ったことは、新たな知識や視点の授業への生かし方についての考えを深め、それぞれの教師が授業改善を進めていく上で有効であったか。	教師へのアンケート 教師へのインタビュー 教師の観察

VI 研究の結果と考察

1 環境整備

市内の美術教師に、本研究についての概要や計画を伝え、「美術のおしゃべり」を基にした授業改善を市内全体で進めていくための協力を仰いだ。また、教師同士がICTを活用した「美術のおしゃべり」に参加できるように、LINEなどのチャットや、Zoomなどのビデオ会議ができるように環境を整備した。

2 実践1（群馬県造形美術教育研究会に向けた「美術のおしゃべり」）

(1) 研修の事前に行った、チャットによる「美術のおしゃべり」（図3）

6月の「美術のおしゃべり」でチャット上に教師Aから群馬県造形美術教育研究会での実践発表に関する相談があった。相談内容は、武蔵野美術大学の三澤一美教授の提案する「造形実験」という手立てを扱った題材づくりについてであった。「造形実験」は単体の題材として扱われている事例が多いが、「造形実験」を単体の題材として扱うのではなく、自画像制作の題材の一部として取り入れるに当たって、どのような題材構想にすればよいのかという相談だった。「造形実験」とはどのようなものなのか共通理解していく中で、試行錯誤する過程をどのように充実させていくのかという話題になった。

文字や資料によるやり取りでは、授業者の具体的な授業のイメージがつか

教師A	おはようございます。 相談があります。 造形実験を単体でやるのではなく、ある題材を深める授業の一部として取り入れようかと思っています。先日、中心教師に頂いたアドバイスで「必要感のある技術の習得」を取り入れたいと思いました。 例えば、自画像を描くときに「自分らしい表現」に近づくために自分が描きたいものに適した材料や表現を実験する時間を2時間くらいとりたいと思うのですが、いかがでしょうか？ 群造美も、技術の習得についてだったと思います。 よろしくお願ひします。
中心教師	お疲れ様です。題材の制作過程の一部に造形実験を取り入れて、作品が変わるというがおもしろいなと思いました。自ら知識、技能を習得する必要があって、とてもいいなと思いました！
中心教師	造形実験について、いろいろと私も調べて書き込みたいと思います！
教師B	私もよいと思います。試行錯誤の時間はやはり必要ですし、技能の選択肢は多い方が発想は広がるかと考えています。また情報があれば伝えていきたいです。

図3 実践1事前の「美術のおしゃべり」の記録
(チャット)

みきれなかったため、中心教師である長期研修員からビデオ会議による「美術のおしゃべり」を提案し、後日ビデオ会議を行うことになった。

(2) 研修会の事前に行った、ビデオ会議による「美術のおしゃべり」(図4)

ビデオ会議では、「造形実験」という手立てを取り入れるに当たって、授業者である教師Aがどのような意図で取り入れたいのか話し合った。教師Aは「造形実験」を通して「創造的な力を十分に働かせて、多様な作品を描かせたい」や「内面と十分に向き合っている、それを豊かに表せる制作にしたい」と話していた。また、「造形実験を通して、写実的な表現こだわらずに、いろいろな自画像の描き方や材料に触れさせて、多様な表現を選んで自画像を描かせたい」という発言から、写実的に描くことのよさだけでなく、様々な人物の描き方のよさに気づき、造形実験を通して表現の幅を広げさせたいという授業者の意図が明らかになってきた(図5)。このことによって教師Aは、題材構想について具体的なイメージがもてた様子であった。



図4 実践1事前の「美術のおしゃべり」(ビデオ会議)

教師B	自分もそれを思っていて、 <u>自己決定するとか、自分で判断していくとかが大切で、そういう力を付けていくことも大切なことだと思ってる。自己決定できる場を作ってあげられればいいのかと思う。だからいろいろなやり方をして制作する子供がいて、それもありがたいと思う。そのときにいろいろな知識や技能をもっていけば表現も広がると思うので、いろいろなことを教えることは大切だと思う。入れた知識は子供たちがどう使うかは自由だから、使っても使わなくてもいいし、前に教わった知識と組み合わせてもいいと思う。それくらいの捉えでいいんじゃないかと思うんですけどね。</u>
中心教師	本画に入る前に、顔の描き方を造形実験でいろいろと試してみたらどうですか。アイデアスケッチと習作の間みたいな感じで。鉛筆だけで描くとか、ピカソみたいに抽象的な描き方で描くとか、いろいろな顔の描き方が出てくるとおもしろいかもしれない。
教師A	造形実験の後にその過程を入れているんですけど、もった後の方がいいのかな。 <u>取り入れる順番を迷っていて。私も自分をどう描くかがメインだと思うんです。造形実験をたくさんやって最後にその活動を入れたらいいのかな。そうしたら変容が分かるかな。</u>

図5 実践1事前の「美術のおしゃべり」の記録(ビデオ会議)

(3) 研修会(群馬県造形美術教育研究会)

美術のおしゃべりの後に教師Aは「造形実験」について自分なりの考えをもって、題材構想を見直して実践を行い、発表をすることができた(図6)。発表の中では、「造形実験」を通して様々な素材に触れさせて、自分自身の描き方を工夫させるための表現力や方法を模索させるような活動を行ったことを報告していた。

(4) 研修会の事後に行った「美術のおしゃべり」

研修会後のおしゃべりでは、「困っていても誰かに聞きづらかったので、おしゃべりができる場があって、気軽に話すことができた」「自分のやりたいことが明確になった」「鑑賞の授業について今後も考えていきたい」という話を聞くことができた。教師Bからは「同じ専門の先生に私見を述べたり聞いたりできたことがよかったし、楽しかった」「試行錯誤の時間の大切さを再認識できた」「自分も造形実験に取り組んでみたい」という話を聞くことができた。



図6 研修での発表の様子

(5) 考察

教師Aは「造形実験」を取り入れた題材構想について悩んでいた。そして「美術のおしゃべり」によって自分の思いを話したり、他の教師の話を聞いたりする中で、「造形実験」を通して、生徒に写実表現のよさだけでなく、いろいろな人物の描き方のよさに気付かせたいと考えることができた。そして、生徒一人一人が内面と向き合い、多様な表現ができるようにさせたいと、造形実験の目的を明確にすることができ、授業改善について自分なりの考えをもつことができた。教師Bの「試行錯誤の時間の大切さを再認識できた」という発言から、教師Bはここでの課題を自分事として捉え、自身の授業を振り返り、自分の授業改善に意識を向けることができたと考えられる。

3 実践2（実技研修会の実施）

(1) 実技研修会の内容

毎年夏休みに沼田市、利根郡合同で開催されている図工・美術の実技研修会において、長期研修員が講師となり、「美術のおしゃべり」を取り入れた、授業改善のための研修を行った（図7）。

小学校の教師に向けた研修では、物語絵を描く題材を想定した研修を行った。「くものこどもたち」という絵本の読み聞かせを聞いて、自分の印象に残った場面を想像して、発想を膨らませて画面構成を考える活動を行った（図8）。紙を人形に切って、動きを考えたり、人形の置き方や大きさを工夫したりして、自分のイメージに最も合った画面構成を考えていった。造形的な視点として、人の動きや構図に着目できるようにさせた。

中学校の教師に向けた研修では、平面構成の題材を想定した研修を行った（図9）。画面構成を考える際、アイデアスケッチをこれまで手で描きながら考えていたものを、1人1台端末を用いてGoogleスライド上で行うことで、数や大きさ、配置、色などを手軽に操作することができると考えた。本研修会では、植物をモチーフにして平面構成を行った。

研修中は、おしゃべりのよさを実感してもらえるように、必要に応じて席を離れて自由におしゃべりをしながら作業に取り組んでもらった。また、研修の中で、その都度気付いたことをおしゃべりしながら進めていくことによって、おしゃべりのよさや授業での生かし方について考えられるようにした。

(2) 活動の様子

小学校の教師向けに行った物語絵の画面構成を考える研修では、それぞれの教師が、物語から自分の印象に残った場面を選び、人形に切った紙を試行錯誤しながら並べて画面構成を考えていた。製作をしながら、他の人が何を考えてどのような工夫をしているのか、近くの人とおしゃべりしながら取り組んでいる姿が見られた。自分の選んだ場面や構図の工夫について、自由なおしゃべりを取り入れて伝え合ってもらった。「人をだんだん小さく配置して、遠近感やスピード感を表した」や「登場人物の一人一人の動きに着目して、楽しそうに遊んでいるところを表した」など造形的な視点を含んだおしゃべりをしていた（図10）。

中学校の教師向けに行った平面構成を考える研修では、1人1台端末を用いて、モチーフの並べ方について試行錯誤しながら画面構成を考えていた。他の教師の作業の様子を自由に見に行き、どうやったのかを互いに質問し合う姿が



図7 実技研修会の様子①



図8 実技研修会の参考作品①

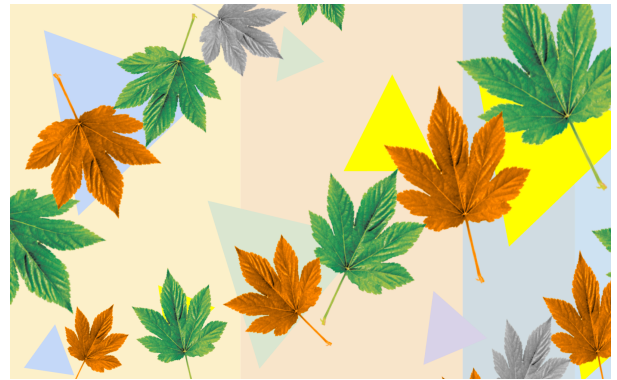


図9 実技研修会の参考作品②



図10 実技研修会の様子②

見られた。導入の説明では、制作をする上で必要最低限の操作説明しか行わなかったが、互いにおしゃべりしながらいろいろな表現を見付けて、それぞれが表現の幅を広げている姿が見られた。「美術のおしゃべり」をする場面では、「モチーフ同士の重なりを意識して構成を考えた」や「他の人が葉っぱの色を変えていたのを見て、だんだん色が変わるように、やり方を聞いてやってみた」「画面の全体の重さを意識して画面を構成した」など造形的な視点に着目して自分の作品を振り返ることができた(図11)。



図11 実技研修会の様子③

(3) 実技研修会後の「美術のおしゃべり」

研修会後に、振り返りとしてチャットで「美術のおしゃべり」を行った(図12)。新たな素材や技能を知るための実技研修に留まらず、「授業づくりの研修はありがたいし有意義だったと思う」という授業づくりを考える研修の在り方についての発言が見られた。また美術科の免許をもたない小学校勤務の教師Cからは「創造的な力を働かせてやってみる、そして価値付けしていくところは図工の授業ではとても大切にしなければいけないということが分かりました」という発言が見られた。また、この研修会を受けた教師から「自分の授業に取り入れてみたところ有効であり、授業改善が進んだ」という意見も聞くことができた。

教師B	実技研修会という素材の研修が多く、楽しく新たな素材を体験できるのはよい。しかし、 <u>実際授業でどう扱うかが課題でした。今回のように、専門以外の先生が図工美術をもつ現状を考えると、授業づくりの研修はありがたいし、有意義だったと思います。準備大変だったと思います。</u>
中心教師	貴重な意見ありがとうございました。また、何かあったらお願いします。
教師B	大したことはしてないのですが、お役に立てて何よりです。頑張ってください。
教師C	お疲れ様です。ありがとうございました。 <u>児童生徒が想像力を働かせてやってみる、そして価値付けしていくところは体育科にもつながり、他の教科にも生かせることだと思います。</u> また、楽しいと思わせるための術や方法はいくつもあって、これからも勉強しなければならないと思いました。
中心教師	ありがとうございました。

図12 実技研修会後の「美術のおしゃべり」の記録(チャット)

(4) 考察

授業への生かし方について考えを深めるといふ本研究のねらいのとおり、実際の研修会では、指導法を始めとする知識や技能を習得するという点だけではなく、授業への生かし方について考えを深めるといふ点に意義を感じていたことが参加者の振り返りから分かる。教師Cの「創造的な力を働かせてやってみる、そして価値付けしていくところは、図工の授業ではとても大切にしなければいけない」という発言からも、研修会で得た知識をどのように自分の授業へ取り入れていくのかについて考えが深められたことが分かり、授業改善に向かおうとする意欲の向上が感じられた。また、研修会での取組を実際に日々の授業に取り入れた教師がいたことから、本研修会を通して授業改善が進んだと考えられる。

4 実践3(沼田市図工美術・書写展に向けた「美術のおしゃべり」)

(1) 普段の授業実践を基にした「美術のおしゃべり」

実技研修会以降、「美術のおしゃべり」に参加をした美術科の免許をもたない、小学校勤務の教師Cから、沼田市図工美術・書写展に向けた作品づくりについてチャットで相談が挙げられた。ここでのおしゃべりは主にチャットで行われた。絵の具の濃さをどのように指導したらよいのかという質問であった(図13)。教師Aからは「何を表現したいのかで決まると思います」と主題をもたせることについての助言が見られた。また教師Bからは、絵の具の濃さの違いから、感じるイメージが異なることについての助言があ

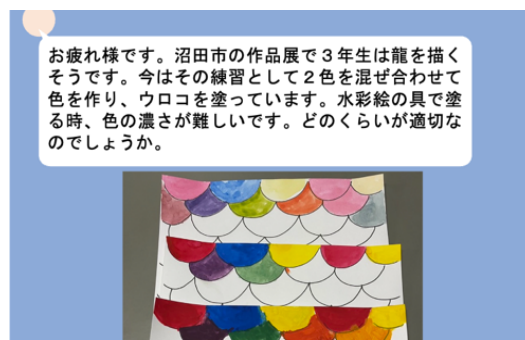


図13 実践3事前の「美術のおしゃべり」の記録(チャット1)

った。教師Cの「児童も濃い色はゴツゴツした感じがするとか、薄い色は柔らかい感じがするとつぶやいていました」という発言に対して、教師Bからは、「そういう言葉が聞こえてくるといい活動って思うね」という発言が見られ、教師Cの取組を称賛し、共感的な雰囲気の中でおしゃべりが行われていることが分かる（図14）。

その後も、「下がきを描かせる際に児童が龍の具体的なイメージをもつためにどのような工夫をしたらいいか」について教師Cより質問が挙げられた。それに対して中心教師から「自分のイメージする龍のイメージを描いたり、友達に説明したりする活動を取り入れてはどうか」という思いを明確にするための活動についての助言を行った。教師Bからは「描く龍にも多様性が見られるように、自分のイメージする龍はどんな龍か児童に話しながらイメージを広げていくのはどうか」という意見が出された。これを受けて、教師Cは児童に、自分のイメージする龍について言葉で書かせて説明させる活動を取り入れた。児童の記述には、「とても強くてパワーをもっている」「負けず嫌いな性格」「勇気があってたくましくて優しい」など具体的なイメージの記述が見られたようであった。その後も教師Cは、「怒っているとどんな感じかな」や「どんな龍にしたら強い感じがでるかな」などの言葉掛けをしながら、児童のイメージを表現の工夫に結び付けようと授業に取り組むことができた様子だった（図15）。

(2) 授業の後に行った「美術のおしゃべり」

作品完成後に教師Cとのやり取りの中で、「一方的に技術を教えることが必要なのではなく、子供の思いと表現を上手く結び付けることが大切だと分かった」という発言が聞かれた。また、「児童が完成した作品を見せながら、たくさん友達に伝えようとしていた」「これまでの製作よりも自分の作品を大切にしている」という発言もあった。

(3) 考察

当初、絵の具の色の濃さについて悩んでいた教師Cは、「美術のおしゃべり」を通して、児童の主題に合わせて児童自身が絵の具の使い方を工夫することが大切であることに気付くことができた。児童に色の濃さから伝わる印象が異なるという点について授業の中で児童から発言を引き出すことができた。この「美術のおしゃべり」を通して、教師Cは、教師が道具の使い方や描かせ方を一方的に指導することが大切なのではなく、児童に表したい思いをしっかりとめ、それに適した表現方法を自分なりに工夫させることが大切であるということに気付くことができた。そして、思いをふくらませる方法を自分なりに授業に取り入れることができ、授業改善を進めることができたと考えられる。授業の後に行った「美術のおしゃべり」での教師Cの発言から、ここでの成果を振り返り価値付けられたことが分かる。

教師A	お疲れ様です。 絵の具の濃さに関しては、私も中心教師と同意見です。何を表現したいかで決まると思っています。
教師A	龍を描くなんてワクワクします！ステキな題材ですね。やってみたいです。
教師B	お疲れ様です。私もお二人の意見と一緒にです。表現の違いとしては 濃い一色ははっきり力強い 薄い一色は柔らかく優しい の違いが出るかな？一言えるのは、一つの龍で濃さは同じ方が、統一感があるかな～参考に でも、小学校も楽しそう 頑張って
教師C	アドバイスありがとうございました。背景は、空を飛んでいたり太陽の光が差していたり、児童のイメージで描いていく感じです。
教師C	今日も色を組み合わせて塗って行きましたが、児童も「濃い色はゴツゴツした感じがする」とか、「薄い色は柔らかい感じがする」とつぶやいていました。
教師B	いいねーそういう言葉が聞こえてくるといい活動って思うね！その言葉を引き出している教師Cもさすが
教師C	先生方に教えていただいて、同じ色でも異なる感じが出せるということ。表現として楽しんでいっていいところでは、児童に前向きに声掛けができたと思います。水彩絵の具に適した？水の量や質感があって、それを子供たちに指導できてない感じがしていたので、少し安心しました。ありがとうございます。

図14 実践3事前の「美術のおしゃべり」の記録（チャット2）

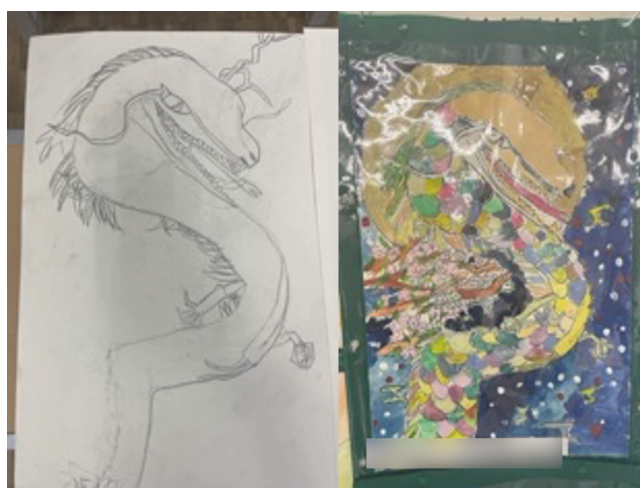


図15 実践3児童の作品

5 実践4（沼田市教育水準向上授業研究会に向けた「美術のおしゃべり」）

(1) 研修の事前に行った「美術のおしゃべり」（チャット）

教師Aより沼田市教育水準向上授業研究会の研究授業で「造形実験」を取り入れたランプシェードの制作に取り組みたいのだが、「造形実験」の位置付けについて悩んでいるという相談があった（図16）。実践1で行った自画像の制作での反省を踏まえて、どのような題材構想にすれば効果的に題材に「造形実験」が取り入れられ、多様な作品が生まれるのかという点について「美術のおしゃべり」の中で考えた。

チャットでは、教師Aのイメージする授業がどのようなものなのかについて、おしゃべりを通して共通理解を図った。そして、この題材における「造形実験」の目的について考え、生徒の制作に「造形実験」が最大限に生かせるようにするための題材構想について議論した。この後、題材構想についてより深く考えるために、後日改めてビデオ会議の場を設定しようということになった。

教師A	造形実験の位置付けをどうしようか考えていて、どの授業を見ていただくか悩んでいます。送ったppは、テーマ設定のための造形実験です。あと考えられるのは、2時間目に試しの活動としての造形実験を入れる。3つ目がこの題材の前に、事前学習として単体で造形実験を入れる。どれがよいと思いますか？
中心教師	テーマ設定のための造形実験の後に、試しの活動としてのシェード作りがあるんですね！最初の造形実験ではいい夢を見るための空間を考えるために、どのような材料でどんなことをさせるのか、すでにイメージがありますか？
教師A	イメージはあります。
教師A	木材、藁、和紙、粘土、セロファン、針金、薄い金属板、綿、糸、毛糸などを考えています。
教師A	造形実験の内容は、暗い空間を用意していろいろな材料を通した光を天井や壁に当ててみて、どのような空間になるのか試す活動をしようと思っています。
中心教師	薰っておもしろいですね！ 試行錯誤の段階でも主題の深まりは期待できると思うのですが、そこの差別化をどうするかって感じですかね？
中心教師	主題を深めるための造形実験なら、「いい夢をみる空間がどんな空間か」について造形実験でどこまで深められるかを追究する感じですかね？
教師B	造形実験は素材がもたらす効果について知って、どんな空間を作りたいかイメージを持たせるための工程ということですかね。いい夢を見るための空間探しまで深めていい感じですか？
教師A	そうです。 ランプそのものも大切なのですが、「ランプが作る空間」を作ることを目標にしたいと思っています。

図16 実践4事前の「美術のおしゃべり」の記録（チャット）

(2) 研修の事前に行った「美術のおしゃべり」（ビデオ会議）

ビデオ会議による「美術のおしゃべり」を行った。教師Dが「造形実験」に興味をもち、このおしゃべりから新たに加わった（図17）。まず、「造形実験」を取り入れる目的が何かについて話し合われた。教師Aは最初、「造形実験」の目的について「表現の幅を広げるための活動である」と説明していた。その後、教師Bから「どこまでがゴールなのか」と本授業のねらいについての質問が挙げられた。教師Aは「『自分のテーマは〇〇です』と画像と文章で言語化できればいいと思っています」と「主題をふくらませること」であると説明していた。教師Bからは「子供の思考がどんなふうに行くのかな」と質問が挙げられて、この手立てのねらいと授業のねらいが異なることを指摘していた（図18）。ここでの「美術のおしゃべり」は中心教師がキーワードをカードにまとめながら分類化していった（次ページ図19）。これにより全体の話が、「授業者の当初の思い」「題材のテーマ」「造形実験と学習プロセス」「授業の流れ」「扱う材料」の五つのキーワードに分けることができた。



図17 実践4事前の「美術のおしゃべり」（ビデオ会議）

教師B	質問でいいですか、この授業でテーマを設定するっていうこといいんですね。大きな目標としては、どこまでがゴールなのかちょっと。
教師A	ああ。文章で、私のテーマは〇〇です。と書かせようと思っていて、画像と文章で言語化できればいいと思っています。
教師B	こんな感じにしたいなと思って始める子もいるだろうし、ただ単純に楽しむ子もいるだろうし、どうやってテーマが決まってくるのか、あまり想像ができなくて。ある程度テーマがあって、そのテーマにあったものを探っていくための実験なのか、何にもないところから、いろいろやってみたら何かおもしろいようなものが出てくるのか、これはいい夢が見られそうな空間だなと生徒が決めていくのか、その辺の子供の思考がどんなふうに行くのかなというところがあまりよく見えていない。教師Aはそこをどんなふうイメージしていますか。
教師A	そうですね。いい夢を見る空間で何？って子供の中に浮かぶと思うので言葉で説明してあげないとテーマ設定までいかないと思うんですね。夜寝るときにどれくらい明るいとか、どれくらいの色味とか、いい夢ってどうやったら見られるのかとか子供たちは考えると思うので、かなり言葉で説明していくのが必要かなと思っています。私も、この1番が重要かなと思っています。

図18 実践4事前の「美術のおしゃべり」の記録（ビデオ会議）

課題が何なのか見えてきたところで、教師Dから「自分だったら、アイデアスケッチをやって、イメージをもたせるかな」と改善案についての意見が出された。その後も、具体的な授業改善案について意見が出されていった。

一連のやり取りを通して、教師Aから「課題が何かとてもよく分かった」「ランプを作るのか、空間を作るのかを明確にした題材構想を考えなければいけない」と授業改善の見通しを具体的にもつことができた様子であった。

(3) 研修(沼田市教育水準向上授業研究会)

沼田市教育水準向上授業研究会(図20)では、教師Aがこれまでの「美術のおしゃべり」で話し合ってきたことを踏まえて「造形実験」のねらいを「表現の幅を広げるための活動」から「主題をふくらませるための試しの活動」へと変更し研究授業を行った。ランプシェードを制作する前段階として、友達同士で意見を出し合い、互いが心地よい空間がどのような空間なのか説明しながら、イメージをより具体的なものにしていくというものであった。生徒は準備された様々な材料を使いながら、互いの心地よい空間について話し合い、実際に試してイメージをより具体的なものにしていった。造形実験の中では「水と泡をイメージした空間」を表現するために、ペットボトルの中に水と薫を入れて振っている生徒の様子や、「森のような空間」を表現するために、木の棒を使って樹木のような影が壁にできるように工夫している生徒の様子を見ることができた。

授業の後に行われた授業研究会の班別協議(図21)では、事前の「美術のおしゃべり」の中ではあまり具体的に出てこなかった場の設定の工夫や学習形態の工夫について話し合われた。班別協議は20分という限られた時間であり、「造形実験」のねらいについて十分に話し合うことができずに、授業研究会後にも残って「造形実験」について自然発生的に「美術のおしゃべり」を行ったが、後日改めてビデオ会議の場を設定することになった。

(4) 研修の事後に行った「美術のおしゃべり」(ビデオ会議)

授業研究会の翌週、改めてビデオ会議を設定し「美術のおしゃべり」を行った(次ページ図22)。授業研究会を受けて、教師Eが本取組に興味をもち、ビデオ会議に新たに参加した。全体では、今回の題材は造形実験が上手く題材に取り入れられたという意見を共有することができた。教師Aから「自画像の制作でも『造形実験』を取り入れたが、自分が想像していたような多様な表現が作品にあまり現れなかった」という振り返りがあった。そのため、このおしゃべりでは「造形実験」の題材への効果的な取り入れ方について改めて話し合うことになった。当初予定していた

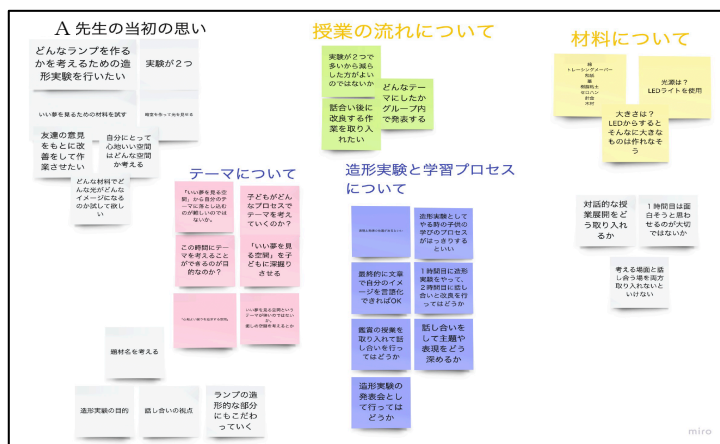


図19 実践4事前の「美術のおしゃべり」(キーワードの分類)



図20 実践4研究授業の様子



図21 授業研究会の様子

おしゃべりの時間を延長して、活発な意見交換が行われた。ここでは自画像を制作する際に、教師の「造形実験」のねらいが曖昧で十分に生徒に伝わっていなかったのではないかと教師Aの気づきが得られた。ランプシェイドの制作で行った「造形実験」では、「主題をふくらませること」が目的だったのに対して、自画像の制作では授業者は「人物を描写する表現の幅を広げること」がねらいであった。そのため、自画像制作の際には、新たな材料や技法を試すだけの場になってしまったのではないかと実践を振り返ることができた。



図 22 実践 4 事後の「美術のおしゃべり」
(ビデオ会議)

(5) 考察

事前に行った「美術のおしゃべり」の中で、当初教師Aは「造形実験」を「表現の幅を広げるための活動」として取り入れようとしていたが、おしゃべりを進めていく中で、「主題をふくらませること」が「造形実験」の目的になったことから、制作をする上で大切なのは「技能」だけではなく、主題をふくらませて、生徒が表したい思いを十分にもつことであることに気づき、授業改善が行われたことが分かる。また、事後のおしゃべりの中で、実践1で行った自画像の制作を振り返り、「制作を行う上で技能面の高まりだけでは不十分である」という気づきが得られたことは、美術科の指導を行う上での教師Aの学力観に変化が見られたと考えられる。

このように、より専門性の高いおしゃべりが、予定していた時間を延長して行われたり、「美術のおしゃべり」への参加者が増えたりしたことから、それぞれの教師の授業改善への意思が高まったと言えるであろう。

6 振り返り

7月と11月に美術教師を対象に「美術のおしゃべり」の取組に対するアンケート調査、及び聞き取り調査を実施した結果は以下のとおりである。記述は11月のものである。

(○成果 ●課題)

質 問 項 目	評 価	
	7 月	11 月
学習指導を行う上で、困り感や不安なことがありますか。 たくさんある：4 少しある：3 ほとんどない：2 全くない：1	3.4	2.6
○図工美術の指導において、様々な考え方や捉え方を知ること、自らの指導や考え方に自信をもてたり、変化をもたらすことができたりした。 ○ビデオ会議やチャットのやりとりで授業の課題が分かった。 ○先生方のこれまでの経験から様々な解決方法を提示してくれて、解決方法を考えられた。 ○「美術のおしゃべり」を通して、自分のやりたい授業ができた。 ○楽しく授業改善に臨むことができた。 ●継続的な取組が必要であり、誰が中心で取り組んでいくのが課題である。		

7 研究の考察

「困り感や不安なことがありますか」という質問において、7月と11月で0.8ポイントの減少が見られたことから、「美術のおしゃべり」によって、課題が解消されて教師が授業改善に向かうことができたと考えられる。

教師からの困り感を基にして、チャットやビデオ会議で繰り返し「美術のおしゃべり」が行われたことから、ICTの活用が、気軽に負担感が少なく「美術のおしゃべり」を行うことに有効であったと言える。

「自己決定論」の三つの欲求の視点で見ると、「楽しく授業改善に臨むことができた」という意

見や、「美術のおしゃべり」への参加者が徐々に増えたことから、「仲間とのよい関係性」への欲求が満たされていることが分かる。教師からのニーズを基にして繰り返し「美術のおしゃべり」が行われたことから、「やることを自分で決められる」ことへの欲求が満たされていることが分かる。「美術のおしゃべり」を通して、「授業の課題が分かった」「先生方のこれまでの経験から様々な解決方法を提示してくれて、解決方法を考えられた」「自分のやりたい授業ができた」という意見からは、「能力の向上を自覚する」への欲求が満たされていることが分かる。このように、三つの欲求を相互に関係させながら満たしていくことで、それぞれの教師の授業改善への意志が高まり、教師がエージェンシーを発揮して新しい知識や視点の生かし方を深めるために創造的なやり取りが行われたと言える。

「自らの考え方に自信をもてたり、変化をもたらすことができたりした」という意見からは、「美術のおしゃべり」の中で、他の教師のニーズを基におしゃべりに参加している教師も、自分の意見を述べたり、他の人の考えを聞いたりする中で、問題を自分事として捉え、自分の授業に対する授業改善を進められたことが分かる。

これらのことから、教師のニーズに応じてICTを活用した、負担感が少ない方法で「美術のおしゃべり」を行ったことは、教師の実践やニーズを基にした創造的なやり取りにつながり、教師が新しい知識や視点の授業への生かし方についての考えを深め、授業改善につながったと言える。

VII 研究のまとめ

1 成果

- チャットやビデオ会議などのICTを活用することで、遠隔地をつなぎながら、多忙な中でも負担感が少なく、それぞれの問題に応じて、授業改善に向けた美術の専門的なやり取りを行うことができた。
- 他の教師の問題について一緒に考えることを通して、それぞれの教師が新たな知識や視点の生かし方について考えを深め、それぞれ授業改善につなげることができた。

2 課題

- 効果的な取組にしていくために、継続的に「美術のおしゃべり」を行う必要がある。

VIII 提言

授業実践につなげるためには、負担感が少なく続けられ、教師のエージェンシーを発揮しやすく、おしゃべりの特徴を生かした雑談型の研修が有効である。

<引用文献>

- 1) 中央教育審議会(2022) 「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について ～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)」 文部科学省 第I部総論4(1)①
https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf (2023-05-22)

<参考文献>

- ・鹿毛雅治(2013) 『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』 金子書房

<担当指導主事>

豊岡 大画 塚田 裕香